

令和7年度第1回市民活動センター評価委員会 摘録

日時：令和7年5月26日（月）午前10時～午後4時30分

場所：京都市役所分庁舎 地下1階会議室

出席者：

（委員、敬称略）東郷 寛（近畿大学経営学部教授）＜委員長＞

杉原 恵（一般社団法人 my turn 代表理事）

鈴木 ちよ（市民公募委員）

森本 純代（一般財団法人藤野家住宅保存会理事）

（事務局）京都市文化市民局地域自治推進室

地域コミュニティ・北部山間振興担当部長：馬場 保行

市民協働・市民活動支援課長：小林 寛

担当係長：別所 隆男

担当：高山 玲子、清松 建大

傍聴者：5名

取材者：なし

議 事：令和6年度 いきいき市民活動センター事業の報告等

開催概要

1 開 会

2 議 事

いきいき市民活動センター（以下「いきセン」という。）指定管理者が令和6年度に実施した事業についてプレゼンテーションを行い、事前に提出された事業報告書も踏まえ、委員から質疑を行った。

また、「京都市いきいき市民活動センター第5期指定管理者募集要項」（案）について事務局から概要を説明し、内容について審議いただいた。

<北いきいき市民活動センター>

（東郷委員長）

市民活動活性化事業について、実行委員会を構築するなど、かなり自立した状況で活動が行われており、評価できると考える。8ページの交流事業でアンケートを取っているとのことだが、アンケート項目が「良かった」「普通」「どちらでもない」の3つだけでは少ないように思う。利用者からは「そうじゃなかった」や「不満だった」といった項目も必要ではないか。次にアンケート項目の「どちらでもない」が26%というのは、人が集まっている中でもったいないと感じる。そういった交流を通じて、新たな市民活動が生じる可能性を秘めていると思う。こういった点が今後の課題になると思うが、どのように考えているか。

(北いきセン)

アンケート項目について、夏祭りであれば、イベント会場全体でアンケートを取るのは人数の多さから難しい現状がある。これまでの窓口アンケートの形式に順じて作成しているが、窓口アンケートも含めて、今後考えていかなければならないと考えている。

アンケート項目が3つしかないという指摘については、真摯に受け止め、具体的に何が悪かったのか、どこを改善すべきかといったことを聞き取れるような形にしていきたい。

(鈴木委員)

30ページの「地域の歴史・文化活動ボランティア養成と歴史研究」事業について質問する。地域の歴史文化の聞き取り調査研究や、歴史・文化関係という失われやすい固有のものを掘り起こし、文書として引き継いでいくという取り組みは、他のセンターにとっても興味深い事業だと感じる。参加人数45名というのは、こうした活動にしては多い印象を受ける。実行委員会の協力団体である地域歴史研究会など、元々研究をされていた方々以外で、今回のボランティア養成を始めてから新たに活動に参加された方々はいるか。また、聞き取りをする側も高齢であるケースがあると思うが、ある程度若い方もこの活動に踏み込んでいるのか。

(北いきセン)

研究会への市民参加については、今回、京都文化博物館や京都市歴史資料館の方に来ていただき話を聞く機会を設けており、その方々が「今度北いきセンでこんな話をするよ」と声かけしてくださったことで、市民ボランティアや周辺地域の方など、京都、特に歴史に関心のある方の参加が多く見られた。予想外に人数が増えたという状況である。聞き取り調査研究については、歴史資料館であるツラッティ千本の職員に大学院生がおり、このネットワークを通じて若い方も含めた調査研究が行われている。昨年度はそれを修士論文として公表しており、良い影響が出ていると考えている。

研究の中で今回は、民族学的なアプローチをしている。京都には古くから部落問題研究所や京都部落史研究所といった研究機関があった。人権問題や同和問題を中心に研究してきた長い歴史があるが、今回の取組は結婚式や葬式といった生活文化を掘り起こそうという試みであり、センターとしてもバックアップしていく。おそらく本としてまとめられることになると思うので、また見ていただきたい。

(鈴木委員)

若い方々、大学院生も含めて活動に踏み込んでいるのは非常に良いことである。活動される側も学びになり、双方にとってWin-Winの関係が築けている。このままだと埋もれてしまう文化的な側面に光を当て、しかも資料化するという点で、非常に期待が持てる事業だと感じた。

(森本委員)

船岡山西ストリートでの取組について、毎年成果があり、皆で話し合った結果が具体的に形になっている。子供たちの経験や体験の格差が話題になる中で、市民活動と子供たちの体験を掛け合わせ、様々な工夫をされていることは見ていて非常に充実した活動だと感じた。32ページの指定管理者の自己評価の中に、「運営スタッフの積極的運用（地域で出ていく活動）」と挙げられている。この地域に出ていく活動というのは、スタッフの皆さんがセンター外で専門性を活かして、例えばコーディネートや相談のようなことをされているというイメージで捉えて良いか。

(北いきセン)

具体的には、京都市の緑政策の中で、船岡山公園事業について、今後どのようなオープンパークにしていくかといった投げかけがあり、一緒にそういう場へ出向いて、こどもたちも含めた公園の在り方について検討に参加している。今年度から本格的に始まっており、市の担当者と共に進めている。もちろん地元の社会福祉協議会がメインではある。もう一つは、市営住宅の解体が進んでいる地域において、困りごと、悩みごとなどを一人で抱え込んでいる状態の方々に対し、配食の見守りだけでなく地域の中で積極的に声かけができるような活動を考えている。

<岡崎いきいき市民活動センター>

(東郷委員長)

音楽を媒介とした市民活動を非常によく実施されていると感じる。イベントを開催されている際に、来場者などからアンケートを取っているか。利用者の話はされていたと思うが、イベントに関するデータは出ているのか。

(岡崎いきセン)

各事業についてはアンケートを取っており、集計結果も報告書に上手く掲載できていない部分もあるが、毎回アンケートは実施しており、課題なども見出すようにしている。

(東郷委員長)

質問した理由としては、そうした活動になる前はイベントへの参加者である場合が多く、イベントや交流を通じて知り合うことが、活動の種となり、新たなサークルや市民活動の担い手となる良い機会になると考えるからである。そうした「人と人との繋がり」といった点についても、アンケートに盛り込んで今後の活動に活かしていくと、より良い活動になるのではないかと考える。

(岡崎いきセン)

アンケートの説明についても、今後改善していきたい。

(鈴木委員)

報告書もカラーで綺麗に作られており、今日のプレゼン資料も見やすかった。これまでやられてきたレコードを聴く会が自走化され、青空音楽会の自立自走というのも実を結んできていることで素晴らしいと感じた。質問は2点ある。

1点目として、報告書にも書かれているとおり、京都新聞などで岡崎いきセンの活動が取り上げられる機会が多いように感じた。報告書でも度々取り上げられたと記載されているが、レコードを聴く会を中心に、いちご栽培に至るまで様々な活動が取り上げられている。担当者に事業のアピールをしているという努力は書かれているが、それ以外にも、これだけ頻繁に京都新聞などに取り上げてもらえる秘訣や取材の受け方に工夫があるのか。他のセンターにも参考になる点があるかと思うので、なぜこんなに頻繁に取り上げてもらえるのか、もし思われることがあれば聞かせていただきたい。

(岡崎いきセン)

秘訣と呼べるか分からないが、とにかくダメ元でアピールするようにしている。指定管理者である NPO 法人音の風は東山区を拠点とする NPO であるが、あらゆる地域で活動しており、その

先で出会う媒体の方々がたくさんいる。その都度、「うちのセンターではこういうことをしています」と話すようにしており、「じゃあ担当の人に言っておくね」といった形で広がりがあったと感じることが多い。とにかくアピールすることが重要だと考えている。センター外でイベントを開催している場合でも、広報紙の担当者を見かけたら、とにかく「今度これをやります」「今これをやっています」という風に話しかけるようにしている。ビジュアルで分かりやすい素材を渡すといったことも工夫している。

（鈴木委員）

2点目として、貸館利用状況のところで、和室向きのものを開発したり、健康麻雀などを新たに企画されたおかげで、令和5年度と令和6年度を比較すると和室の利用時間が劇的に増加していることは素晴らしい。会議室1の利用も増えている一方で、会議室2だけが減少しているという点が、まとめでも指摘されている。会議室2だけがあまり伸びていない理由や、今後この状況を改善するために何か考えていることがあるか聞かせていただきたい。

（岡崎いきセン）

会議室2には卓球台を置いているのが、センターの特徴の一つである。会議室2のゴールデンタイムは常に埋まっており、利用の伸び代があまり望めない部分もある。しかし、卓球は1時間だけでも利用してくれる方もいる。一時、コロナ禍を経て個人の卓球利用が料金改定により減少してしまったが、そこをもう一度復活させるような働きかけ、「卓球で1時間でも体を動かしませんか？」といった呼びかけができれば、利用しにくい隙間も埋まっていくのではないかと考えており、センター内でその点について話し合っている。

（鈴木委員）

なるほど、他のセンターでも卓球が人気だと聞いている。まだリーチできていない層があるのかもしれない。条件の違いはあると思うが、よくやられていると思うので、贅沢な注文かもしれないが、会議室2についても引き続き開拓を期待している。

（杉原委員）

アンケートの内容や相談について（報告書21、22ページに記載）、分かりやすく具体的な回答が示されており、非常に良かった。また、課題として、自立してきたチームが育ってきたことは素晴らしいプロセスだが、その先で誰もが経験するであろう課題を感じていると述べられていた点について、センターとしてどのような具体的な解決策を考えているか。何か上手くいったことや、どうしても今すぐクリアできないと思っていることなどがあれば教えていただきたい。

（岡崎いきセン）

具体的な解決策はまさに現在進行形で、スタッフで話し合っているところである。私自身が感じていることとしては、自立したグループに対しては、とにかく話を聞くことぐらいしかできないのではないかとということである。そこは丁寧に実施していきたいと考えている。不安を感じている方には、「嫌なことがあったら、センターにいつでも少しでもいいから話しに来てね」という形で、まずは話を聞くことをする。一方で、これと相反することではあるが、必要以上に関与しないようにすることも重要だと考えている。スタッフ全員が「何かしてあげたい」という気持ちに溢れているため、私から見ると「少し手助けしすぎているのではないか」と感じることもある。そういった時に「ここは我慢」といった形で、見守るということをスタッフと共有し、「ここはどのように見守るべきか」といったことを毎回話し合っている。センター長としては、スタッフは

一人一人性格もアプローチも違うため、その辺りをコントロールしながら、センターとしての主旨が一貫するように心がけている。スタッフも少しずつ慣れてきて、「我慢が必要だね」といった雰囲気にもなっている。これが上手くいくかどうかはまだ分からないが、試行錯誤しながらやらせていただいている状況である。

(杉原委員)

質問の意図は、大きくなっていく活動がどんどん外に出ていくことは素晴らしいことであり、今後もこうした活動は増えていくと思う。そうした団体が、より気持ちよく活動を継続しつつ、センターの力も借りながら、さらに外へ広がっていくことが理想だと感じた。そのために様々な工夫や苦労があるのだろうと思い、質問した。コミュニケーションや、「引きながら押しながら」といった形で進められているとのことなので、また来年度の報告で、その結果を聞かせていただきたい。

<左京東部いきいき市民活動センター>

(東郷委員長)

地域の市民活動を積極的にされており「シャカカツの人」など興味深く良い取り組みをされている。今年度で左京東部いきセンは供用を終えることになる。このような良い活動をどのように他のセンターに引き継いでいくか、そういった事業の継続性や引継ぎについてはどのように考えているか。

(左京東部いきセン)

マンパワー、つまり人が減ると、どうしても人手不足という問題が出てくるため、そこでの兼ね合いがある。しかし、せっかくやってきたことなので、特に「シャカカツの人」のようなインタビュー事業は継続したいと考えている。こうした事業は波及効果が大きいことに加え、インタビューを通じて実際の生の声を聞くことができ、地域の課題を把握することに繋がる。また、若い人と一緒にインタビューすることで、若い人にとっても教育効果となり、様々なことを知る機会となる。このような取組は地道に続けていきたいと考えているが、人手と予算の問題があるため、それさえ何とかなれば継続していきたい。

(東郷委員長)

こういった活動を通じて、特に外国の方々の声を聞き取り、考えていることを報告してもらうことで、普通の日本人には分からないこともたくさん見えてくる。非常に有意義な活動なので、今後も何らかの形で続けていただければと思う。

(鈴木委員)

委員長もおっしゃっていたが、クロージングを見据えつつも、ある程度の時間に収めるという難しいバランスを取って活動されている中で、従来からの演劇的手法やインタビュー技術や、その結果を見せる冊子や展示といったところは、左京東部いきセンの大きな財産であると思う。そのあたりの引き継ぎについては、今後も考えていくべき点である。

また、13ページに記載されている自己評価の「解決すべき課題」の項目で、利用者から活動を継続させるための代替場所や情報についての問い合わせが増えており、情報収集と提供を行っていきたくて述べられている点について質問する。現状、問い合わせがあった場合、左京西部など他のいきいき市民活動センターなどを案内されているのか。具体的にどのように対応されている

か聞かせていただきたい。

(左京東部いきセン)

現状では、近隣のいきいき市民活動センターを含めて案内している。しかし、体育館（多目的ホール）を使っている団体さんについては、具体的に紹介できる代替場所としては地域体育館くらいしかないのが現状である。しかも地域体育館は稼働率が非常に高いため、体育館に関してはあまり紹介できていないのが実情である。

(鈴木委員)

なるほど、確かに条件が東部と西部ではだいぶ違う。地域としては近いのだが。

<左京西部いきいき市民活動センター>

(東郷委員長)

市民活動活性化事業として本当に工夫されていると感じている。施設の利用や満足度などのデータ分析が不足している気がする。利用者やイベント参加者の属性、利用団体数などをもう少し分析し、それがニーズの発見や次への繋がりに活かせるよう、データ分析の視点を入れていく必要があるのではないか。特に施設利用者が減少傾向にある中で、より多くの人に来てもらうためには、アンケートなどを通じてニーズを発見することが求められる。その点についてどのように考えているのか。

(左京西部いきセン)

利用者分析自体は行っており、ジャンル別やどの地域から来られているかなどは把握している。資料には膨大すぎて載せられなかった。ざっくりとした数字としては、文化芸術団体が 60%程度、体操やダンスなどが 10%程度である。この中でも、音楽系の団体が増加しており、以前は演劇系が多かった。音楽団体はパート練習などで利用し、そこから個人利用に繋がるケースも増えている。彼らの要望として音が出せる場所というのがひとつであり、小さな部屋にパンチカーペットを貼るなどの工夫をしている。また、利用者の意見を聞き、当日の電話受付を昨年度末から開始した。これは年間 220 件、485 時間の利用があり、電話予約できない不便さを解消し、予想以上に利用が多かった。

(東郷委員長)

良い取組をされている。そのあたりのことも報告書に書いていただければより良いものになると思う。

(森本委員)

事業全体として相互に広がっている点が良いと感じた。特に子供たちがボランティア活動に多く参加している点が特徴的である。お客さんとして楽しんでもらうものは多いが、子供たち自身が主体的に活動に参加し、人に対して何かをしたり、教えてもらいながら何かを経験したりする機会は少ないのではないか。子どものボランティアを大人のボランティアが見守る中で、子供たちが自然な形で地域の活動に参加し、やる側・見る側の両方を経験することで、地域の催しを通してボランティアはやらなければならないものではなく、やってみるものだという感覚を養える

場になっているのはとても良い。いろいろ増えると楽しいのではないか。

(左京西部いきセン)

子供たちの参加が増えることで、大人のボランティアも増えるので一緒に楽しめる機会が増える。お化け屋敷に校長先生なども参加してくれるのは子供たちも喜んでいる。

(森本委員)

近所の小中学校の先生方と連携して、学校ではできない活動をセンターでできればという意見が出てきているのが良い循環である。外国人住民へのトークイベントも良い取組だと思う。トークイベントなどで彼らが地域でどう感じているかを聞く機会は重要である。

(左京西部いきセン)

言葉の壁や、ゴミの分別など、知っていれば問題ないことも、知らないために居心地の悪さを感じたりすることがある。インタビューを通じて、そういう実情を知ることができるのは面白い。自治体によってゴミの分別方法が違うといった話も興味深い。そういった課題をどう乗り越えるか話し合う機会は、新たな発見に繋がる。

(杉原委員)

参加者数が非常に多いのが印象的であり、それが成果だと感じた。楽しみながら学ぶことがキーワードになっているのではないか。SDGs やアップサイクル、防災といったテーマは、どうしても「しなければならない」という意識になりがちだが、そうではない部分が多いので人が集まってきていると感じた。このプロセスやノウハウは他のセンターへのヒントになる。また、次年度への期待として、こういった活動により行動変容が起きた時に、それがセンターの存在価値に繋がるのではないか。イベントの感想だけでなく、そこで得た考えや交流が、地域や自宅での日常生活にどう変化をもたらしたかまでヒアリングできれば、SDGs、アップサイクルなどの取組の意義がより具体化し、他の場所での再現性にも繋がるのではないか。今後の活動に期待したい。

<中京いきいき市民活動センター>

(東郷委員長)

様々な団体との活発な活動が行われ、この2年間で劇的に変わった状況が維持されているのは素晴らしい。外部から様々な団体が来ているが、それを受けて内部から団体やサークルが生まれるような内発的な支援は行っているか。

(中京いきセン)

イベントに参加して何かをしたいと思った人や、センターを初めて知った人に、「こういうことができますよ」という案内をすることで、サークルが立ち上がった例が何件かある。これをさらに増やしていきたい。センターの活動を見せながら、利用者の「やってみたいこと」を聞き、誘導していこうと考えている。まだまだセンターを知らない人が多く、イベントなどを企画することで来てもらえるため、そこから活動を広げていきたい。

市民の方から、センターで何かをしたい、こんな特技を持つ人はいないか、といった問い合わせが増えてきている。センターが知っている範囲で、他の団体に聞けば繋がるかもしれない、という情報提供を行っている。それによって、子供のサークルができたり、活動を休止していたサークルが再開したりした事例がある。

(東郷委員長)

既存の団体のマッチングや資源を繋げることで、そのような成果が出ているということか。

(中京いきセン)

他の団体のイベントにも積極的に参加し、情報収集や繋がりに努めている。

(鈴木委員)

様々な世代やNPO、企業など多様なステークホルダーを巻き込み、参加者が増えているのはもちろんのこと、上手く一つのテーマ（SDGs など）に集約させて多様な事業を展開しているのが素晴らしい。広報誌「中京いきいき通信」は、内部で作成したとのことだが、読みやすく分かりやすく、写真も多く非常に良いと思う。業者に委託するよりコストも削減でき、内部のスキルアップにも繋がっているとのことだが、何かきっかけがあって自主制作に切り替えたのか。

(中京いきセン)

現在広報担当は3名おり、ダブルワークや、チラシ作りやSNSが得意な人がいる。事業担当者も一緒に企画に関わってくれるため、内容を表現しやすい。以前から外部委託ではコストが高いつと感じていた。一度自分たちでできる範囲でやってみようと思つたところ、様々な意見が出て、結果的に良いものができたので良かったと考えている。

(杉原委員)

自主制作の取組は、他のセンターにも参考になり、自分たちでここまでできるということを示せたと思う。今後も期待している。

(森本委員)

「こういうことやってみたいんだけど誰かいないかな」という問い合わせが来るのは、センターが様々な事業を通じて多様な人々と協力していることが知られ、中京いきセンに聞けば何かアイデアや繋がりがあるかもしれないという認識が浸透してきたからだと思う。日頃のフットワークの軽さやネットワーク作り、そして実施した事業が着実に成果を上げているからこそ、次に何かをやりたいという人の背中を押せているのだと改めて感じる。

<東山いきいき市民活動センター>

(東郷委員長)

区や企業との連携、多様な取組がなされ、手堅く活動されていると感じる。質問だが、新たな活動が生まれるという点で、対話型ワークショップの参加者の属性等の分析は行っているか。

(東山いきセン)

細かい分析は行っていない。今までは誰もが参加できる形を重視し、その場を作ることを大事にしていたため、参加者を分析して何かをしようというところまでは進めていなかった。

(東郷委員長)

イベントに参加したことがきっかけで新たな市民活動を生み出す場としては機能しているか。

(東山いきセン)

そこまで繋がればと思つているが、「しゃべくり大作戦」に関しては、何かを生み出すことに重

きを置くと参加者が離れてしまう可能性もあるため、あくまで喋る場としている。そこから生まれたニーズは「東山で企画会」という形で、活動している人たちが繋がる場を設けている。

（東郷委員長）

今後の展開についてどう考えているか。

（東山いきセン）

「東山で企画会」の参加者は現在 10～15 人程度で、不定期開催（3 箇月に 1 回程度）であるが、メンバーと連絡を取り合い実施している。戦略的に行うのであれば、もう少ししっかり計画する必要があるかもしれない。これも我々だけでなく、一緒に活動してくれるメンバーと作っている。参加者同士の連携は生まれている。

（東郷委員長）

具体的にどのような連携事例があるか。

（東山いきセン）

例えば、社協と京町家を改修したリノベーションスペースで活動している人たちが連携し、社協と一緒によろず相談のような形を運営したりしている。また、空き家を改修してリノベーションしたいという方と、既に改修してゲストハウスとして運営している方が繋がり、一緒にやろうという話になったりしている。センターでの出会いから生まれたものもある。

（杉原委員）

インターネットラジオ番組について、他のセンター（下京いきセン）へノウハウを共有したと記載があるが、具体的な内容を教えてほしい。東山いきセンは積極的にノウハウを共有していると感じる。動画配信なども含め、スキルアップスクールなど、振り返りでは回数が減ってしまったとあったが、東山区で何かを発信したい人がツールを通して発信する場になりうると思う。開催回数を増やさずにできる工夫として、オンラインでの実施などを考えているか。

（東山いきセン）

インターネットラジオについては、同じ運営団体である下京いきセンの方からノウハウについてヒアリングがあり、やり方などを伝えた。スキルアップスクールに関しては、実技が難しく、オンラインだとやりづらいという課題がある。過去にオンラインで実施したこともあるが、カメラ設定や編集画面の共有などが難しく大変だった。ただし、座学的なレクチャーであればオンラインでも完結できるため、そのように分けることは有効かもしれないと感じている。

（杉原委員）

これらのスキルは地域での雇用創出にも繋がる可能性を感じている。

（鈴木委員）

サロンがなくなるということで、交流スペースのリノベーションを大学生とワークショップ形式で実施したとのこと。写真で見ると本格的にリノベーションされているように見える。学生が主導して実現したとのこと非常に面白い取組であり、その作業自体も事業として市民を巻き込んでいる点も素晴らしい。今後、このスペースは旧来のサロンの役割を引き継ぎ活用していく計画か。

（東山いきセン）

そのように考えている。サロンで実施していたイベントや多世代交流に繋がるイベントを開催

していきたい。まだ具体的な形にはなっていないが、ここで e スポーツ大会を実施したり、ものづくりを通じて人が繋がるような方向でやっていきたい。つまり、これまでの活動をここで実施することに加え、市民がここを使って何かをやりたいということを実現できる場にしたい。

(鈴木委員)

従来のサロン機能だけでなく、オープンスペースの良さを活かし、新しい活動にも繋がる場所にしていくということで、広がり期待できる。

<久世いきいき市民活動センター>

(東郷委員長)

前年比で利用件数が増加したとのことだが、具体的にどのような工夫を行ったのか。近くにある同じような施設（久世ふれあいセンター）との差別化はどうか。

(久世いきセン)

久世ふれあいセンターとは、話し合いを行い、地域でまとまっていくようなことを互いに協力して行うこととした。老人の活動場所がないという声が多く聞かれたため、体操などを行っている場所と相談し、何をされているのか聞き取りを行った。利用者の意見を聞くと、毎週のようにやってほしいという要望があったため、互いに協力的に実施できるよう働きかけている。

(東郷委員長)

それはふれあいセンターとの差別化というよりは、互いの連携、取組があったということか。

(久世いきセン)

そうだ。

(東郷委員長)

利用件数の増加は全身鏡の設置によるものか。

(久世いきセン)

多少は関係があると思う。全身鏡の評判が非常に良かった。最初はどんな感じかわからないため、とりあえず一度全身鏡の部屋を見てもらうようにした。部屋を見てもらうと様子が分かり、その噂が広がって一つの団体から他の団体へと利用が広がった。隣町から来るようになったり、噂を聞いて自分で利用する人も出てきた。ダンスだけでなく、殺陣など全く違う使い方をする人が増えたことに驚いている。

(東郷委員長)

他にどのような利用者の要望が増えているか。予約システムや音楽利用について聞きたい。

(久世いきセン)

音楽利用について、一人で練習に来て管楽器を持ってくる人がいた。一度試してもらったところ、周り近所からクレームはなかった。利用者からは十分音を出せていると言われるが、建物の外や裏側を回っても音漏れはあまりなかった。そこで一人で練習できる場所だと分かったら、ロコミで他の人に伝わり、クラリネットの練習に来る人も出てきた。音楽利用の要望が増えている。

(東郷委員長)

そういった音楽利用について詳細を報告書に記載してもらえると良い。どう利用増に繋がったのかまで書いてもらえるとより良い内容になる。

(森本委員)

ペーパーフラワー教室は、令和 6 年度は自主事業ではなかったとのことだが、どのように実施されたのか。

(久世いきセン)

利用者が折り紙で作ったものを持ってきてくれ、自主事業になるかわからないため、案内の紙を部屋に貼って興味のある人に声をかけてもらうようにした。しばらく飾っていたところ、作り方などを尋ねる人が増えた。そこでみんなでやってみようということになり実施したところ、予想外に 30 人ほど集まり非常に好評であった。先生が一人で、病気になられたため一度は断念したが、再度お願いしたところ引き受けてくれた。それが再び評判が良く、だんだん他の場所でもやってほしいという声が増えてきた。子供たちがメインだったが、最近高齢者と話す機会があり、高齢者からも参加したいという声があった。高齢者の目に届くようにチラシを貼る場所を探す必要があり、銭湯や近くの施設にポスターを貼ってもらうことを検討している。一番前のガラス戸に貼ることも話しており、おそらくこれで上手くいくと思う。

<下京いきいき市民活動センター>

(東郷委員長)

SDGs コミュニティオーガナイザー育成・支援事業のうち、若者（主に芸大生）の活動相談や伴走支援について、具体的にどのような活動を支援し、卒業後の継続性やその成果をどう捉えているか見えにくい点がある。事例があれば説明してほしい。

(下京いきセン)

事例として、きょうげい B-LABO の革靴作りを紹介する。これはプロダクトデザインを専攻する学生の制作活動で、地域の資源（革靴作り）を取り込みたいという思いにセンターが伴走したものである。かつて地域では革靴作りが盛んであったが、現在は職人がほぼいない状況である。学生が靴を作る過程で地域のおばあちゃんたちが「昔家で兄や父が作っていた」「こうしたら面白い」「この道具が良い」などとアドバイスをしてくれた。この活動の目的は地域産業の復興というよりは、おばあちゃんたちが自分の言葉で思い出を語ることで、これまでの人生を誇りに思えるようなエンパワメントを生み出すことであった。アート表現と地域住民の関心事を結びつけることを目的としたイメージである。

(東郷委員長)

活動は個人の学生が行っているようだが、その学生が卒業・引越すれば終わってしまうのではないか。継続性や活動を団体として継続させていくような支援について、センターの考えを聞きたい。

(下京いきセン)

幸いなことに、革靴を作った学生は熱意があり、大学を卒業したが京都に住みたいという話があり、就職先も京都で、引き続き活動を継続すると言ってくれている。そのモチベーションをしっかり高められた点は良かったと思う。一方、ご指摘のとおり、個人で続けていく以上、継続性には課題があることはよく理解している。活動を団体として継続させていく支援も実際に行って

きたが、なかなか難しいと感じている。あくまで個人的な意見であるが、これまで関わってきた芸大生は他の子と一緒にチームを作って活動するのが難しい特性があるのかもしれない。ただし、彼が活動を続けていく以上、地域の方々のエンパワメント、地域の方々への影響は続いていくと思う。彼をこの地域の中の重要な役割、重要な存在として位置づけていけるか、そういったところの伴走支援が必要であると感じている。

(森本委員)

副業型研究員による連携事業でのツアープログラムについて、市民活動の目的や内容を言葉にしても伝わりにくい部分がある中で、実際に活動している現場を見に行くことは非常に重要であるとする。活動者の現状や大切にしていることが見学を通じて学べることは、受け入れる側にも参加者側にも大きな学びの機会であり良い取組であると思う。大変だとは思いますが、このような機会は継続してほしい。

また、サロンでの多世代交流拠点化事業について、小学生が企画したという点に驚いた。子どもたちは、学年が違って、あまり学校に来ない子も集まるようにしたいという思いを持っており、それをセンターが聞き取り、実現できたことは素晴らしい。小学生からそのような声を聞き出すのは難しかったと思うが、具体的にどのようにして聞き出したのか。また、企画を実行する上で大変だったことや、やってみて感じたことは何か。

(下京いきセン)

最初に出てきた子供たちの声は「お泊まり会がやりたい」というものであった。担当スタッフが子供たちと雑談しながら丁寧に聞き取っていくと、同じ小学校に通っていても学校に来られない子がいること、学校以外の場所でそういう子たちと遊べる場所があったら良いのに、という思いが根底にあることが分かった。おっしゃるとおり、この思いを聞き出すのは容易ではなく、丁寧な聞き取りが必要であると感じた。

お泊まり会という希望に対しては、センターだけではサポートしきれない不安があった。地元の自治連合会、児童館、長年子供たちの社会教育に関わってきた教育連絡会の方々と相談した結果、最初からお泊まり会をするのは止めておいた方が良いという意見をいただいた。子供たちの「やりたい」を完全に否定するのは違うと考え、日帰りという形で「学年色々交流会」を実施した。

他の市民活動者にも当てはまることだが、強い思いを持って相談に来られても、それがそのまま地域の中で受け入れられるか、真正面から受け止められるかはタイミングがある。そこをうまくコーディネートし、他の人の意見を聞きながらまとめていくことが、私たちセンターに求められている役割であると感じている。

(杉原委員)

副業型研究員による連携事業で作成したオンラインコミュニティについて、現在 31 名の参加者がいるとのことだが、このコミュニティの中から「新たなツアーをやってみたい」という方を見出していくことが、今後の事業の持続可能性や発展にとって非常に重要になってくると思う。そのための具体的な仕掛けは何か考えているか。

(下京いきセン)

担当スタッフと話していることだが、現状はオンラインコミュニティ(LINE オープンチャット)

に登録しているという段階に留まっている。やはり SNS 上のやり取りだけでは難しいため、対面で交流する機会を持ち、参加者がやりたいことやこれまでの経験を分かち合える交流会を企画している。そこにはセンター職員や、副業型研究員である旅行会社の方、公園技術支援に関わる方などが同席し、参加者のアイデアを表面化できるような仕組みを考えている。まずは顔を合わせて話す機会を作るところから始めたい。

<吉祥院いきいき市民活動センター>

(東郷委員長)

六斎念仏やジャンボリーといった地域活動への支援、市民活動全体の拡大といった取組を行っているが、様々な活動の中で、活動団体の横の繋がりや事業同士の連携・組み合わせをどのように考えているのか聞きたい。

(吉祥院いきセン)

ふれあい広場というイベントを開催しており、そこで利用者同士の交流を促進している。

(東郷委員長)

それは同事業の利用者同士の繋がりについてだが、各事業の参加者の横の繋がりについてはどうか。様々な事業があるが、それぞれの事業の参加者間の繋がりについて考えているか。

(吉祥院いきセン)

事業に参加されている方は、いきセンの活動が好きで「次は何をやるのか」と事前に聞きに来られる方が多い。毎回参加される方もおり、そういった方が口コミで友達を連れてきてくださる。そのような中で参加者同士が非常に仲良くなり、そこからサークル活動に発展した事例もある。

(東郷委員長)

他のセンターでもこういった交流を促す取組を行っているところもあるので、やってみるのも面白いかもしれない。

<上鳥羽北部いきいき市民活動センター>

(東郷委員長)

エコ活動を中心に据えつつ市民活動の輪を広げている取組は素晴らしいと思う。一方、地域には様々な課題があると思うが、それらの課題をどのように発掘・解決し、エコ以外の地域課題も組み込み、活動の組織化や支援をどう考えているのか聞きたい。

(上鳥羽北部いきセン)

当法人の代表が上鳥羽学区の町内会長を務めており、普段から地域のことについて話す機会があり、最近、町内会に加入する家庭が減少し、地域活動に参加することが少なくなっているという話をよく聞く。また、小学校の登下校の見守りをする方も高齢化している。こういった地域活動の大切さについては、ニュースレター「つむぐ」や夏祭りなど、様々な媒体で発信することを考えている。町内会に入りましょうといった直接的な働きかけは難しいが、地域活動の良さをPRすることは可能であると考えている。

(東郷委員長)

市民活動支援団体として、そういった地域住民からの相談を受ける窓口になっているのではな

いか。積極的に相談を受け、助言や支援を行うべきだと思う。若い人が地域活動を嫌がるのは、活動への参加の仕方に問題があるのではないか。昔ながらのやり方ではなく、楽しく活動できるような雰囲気作りが重要である。楽しい雰囲気を作れば参加者も増えるため、そういった雰囲気作りの助言や場の提供を通じて、地域活動の活性化に繋がられるのではないかと思う。

（森本委員）

「上鳥羽いきいきプロジェクト」のプロジェクトメンバーについて、働いている世代の方が多く、様々な制約がある中でも役割分担をしながら活動を継続されていると報告書に記載されていた。なぜ働きながらも市民活動が続けられるのか、どのような点が効果的であったのか、モチベーションなどについて教えてほしい。

（上鳥羽北部いきセン）

メンバーは、上鳥羽地域を中から元気にしたいという思いをもって集まっている。10数名のメンバーがいるが、常に動いてくれるのは8名程度である。月に一度、仕事が終わった夜に集まって定例会を開いており、そこではニュースレターの原稿や次のイベントについて話し合うが、事業内容だけでなく、近所のおばあちゃんの話など町内の情報収集、意見交換の場となっている。1時間で終わらず、そのままラーメンを食べに行ったりするなど、コミュニケーションを深めている。職員もメンバーとして参加しており、職員とボランティアスタッフという関係ではなく、皆が一体となったメンバーという意識である。口コミで人が増えたり、地域との繋がりも大切にしている。何か特定の役割を強制されているというよりは、皆で何かをしたいね、というイメージで活動を進めている。働いている人も「この日なら」「1時間だけなら手伝う」といった形で声を掛け合って参加し、グループLINEも活用している。仕事のような形ではなく、皆さんのライフワークの一つとして捉えて活動しているメンバーが多いと感じる。

（鈴木委員）

エコ事業を中心として、自立自走化に向けた担い手側の育成が進んでいることは素晴らしいと感じている。JICA研修生の視察を受け入れ、その発表会で、センターの活動内容が研修生のアクションプランに反映されたとのことだが、具体的にどのような内容が研修生のプランに反映されたのか、もし分かれば教えてほしい。

（上鳥羽北部いきセン）

研修生が特に興味を持ったのは、センターの屋上に設置している太陽光発電についてであり、どのような経緯で設置することになったかということについて何度も質問を受けた。発表会に出席した別の職員からの報告によると、研修生は、本国に帰って協力者を探すことや太陽光発電の設備を作る難しさについて発表で書いていたとのことである。

（鈴木委員）

センターの太陽光発電は長く運用しているものであり、それが思いがけず海外にも共有されたことは良い機会であったと思う。ロケットストーブについても、従来の活動が他のいきセンにもノウハウが広がり、これまでの活動が外部との間で良い循環や相乗効果を生んでいると感じる。エコ以外の社会課題も取り込みつつ、上鳥羽北部の強みである丁寧なエコ活動は今後も期待したい。

<上鳥羽南部いきいき市民活動センター>

(東郷委員長)

市民活動支援という点で、力量不足を自覚されているとのことであるが、どのように専門性、力量をどう高めていくのか、方法、課題など、詰めていかないといけないと求められるレベルに達しないと思うが。市民活動に詳しい者に実際に職員として入ってもらうことなども考えないのか。

(上鳥羽南部いきセン)

今は職員の中で市民活動に本格的に関わったことのある者はいない。以前は市民活動の経験がある職員がいたが、体調を崩しており十分な活動ができていない。

しみセンの研修に参加して学ぶほか、今年3月でやめられたまちづくりアドバイザーからアルバイトで手伝いに来てもいいという話もいただいている。事業のアイデアもお持ちで市民活動に詳しいため、実際に職員として入ってもらうことなども考えている。

人材育成は長年の課題である。人が変わり徐々にやり方が変わりつつあるが、人数的な課題もある。今後は人材育成を含めて、一つずつ進めていきたい。

(東郷委員長)

まちづくりアドバイザーを巻き込んで構築していくということも目標として考えてほしい。

(上鳥羽南部いきセン)

他のセンターの報告を聞いていると、サロンに近所の人に来て、それが活動に繋がっているという話があったが、本センターは場所が不便ということもある。

(東郷委員長)

場所の不便さも影響しているかもしれないが、市民活動支援という点で専門的な視点をしっかり持っていくことが重要である。

(鈴木委員)

利用促進について、市民の困りごととか社会課題解決に向けた市民活動、伴走型の事業をどう育んでいくかという事業を期待する。

一方で、今回のコイノボリによるまちづくり取組みは、以前から行われていた活動があまり地元知られていなかったものが、いきいきセンターが関わることで市民に周知され、子供たちが実際に手伝いに参加するなど、市民を巻き込みながらセンターがコアとなって、ひとまち交流館の文化祭にも出展するなど、これまでに上鳥羽南部いきセンになかったアウトリーチ型の事業になっていると感じた。

このように、地域の中にあつたが埋もれていたものや、様々な活動者と連携し、外に出ていくことで、新たな化学反応が生まれ、協力したい人やセンターの場所を使って何かしたいという人が出てくると思う。外部出展などのノウハウがない中でも文化祭などへの参加を実施しており、今後もこのような丁寧な市民へのヒアリングや外部連携を通じて、センターへの還元につながる活動を期待したい。

(上鳥羽南部いきセン)

昨年度からコイノボリの取組みをしている、今までできなかった取組みの一つである。10年以上前から活動はあったが、なかなか連携が十分ではなかった。

今後に向けて、今回の取組みをコアにして、人材確保を含めて一つずつ前進したい。ただ、セ

ンターの人材育成等は長年の課題。徐々に人や手法等が変わってきたが、まだまだ人数不足は課題である。その辺りを含めて、一歩ずつではあるが市民活動に関わる人材を育てていきたいと思う。

<醍醐いきいき市民活動センター>

(東郷委員長)

場所が不便なところに関わらず、貸館利用件数も前年比 103%とすごい。大学や様々な地域の団体と連携し、子供たちを中心に活動されている。組織運営体制について、職員が6名程度とのことだが、特定の職員にノウハウが偏るのではないか。ノウハウを組織内で共有する仕組みや研修などはあるか。

(醍醐いきセン)

人数が少ないため、集まった時に全員で集まることができる。会議を設けるというより、常にスタッフ同士で意見交換ができるような体制ができている。

スタッフそれぞれに得意なスキルがあり、それを活かしている。得意な部分は伸びているが、そうでない部分は他のスタッフが補いながら、できないことは素直に話して他のスタッフが担当するなど、少ない人数ながら協力してやっている。

まちづくりアドバイザーや協働コーディネーターも常に入ってくれているので、助言を得ながら取り組めている。なんとなく皆でカバーし合っていると感じている。

(鈴木委員)

様々なことに上手く取り組まれていると感じた。令和6年度は特に子供さんを主体にした点が素晴らしい。夢コレクションでの子供主体企画や、醍醐みらいユースセンターの立ち上げなどが挙げられる。

意外と若者の居場所がないという現状に焦点を当て、若者ならではの悩みを上手に拾い上げ、若者主体性からイベントや居場所作りが始まっているのが素晴らしい。子供たちが意見を受けるだけでなく、担い手やボランティアになるという流れが生まれているのも素晴らしい。

醍醐夢コレクションで初めて企業（ニッセン）と連携したとのことだが、どういう経緯で企業との連携に至ったのか。今後も企業に限らず様々な団体とコラボしていく予定はあるか。

(醍醐いきセン)

そもそもニッセンから声がかかったのがきっかけである。その企業が京都市の助成金（オープンラボ）を取得したが、醍醐山科地域で会社のCSRとしてやりたいが経験がなく事業の進め方が分からずどうしたらよいかというとの相談が大学にあり、大学がいきセンを紹介したのがきっかけである。

夢プレゼンテーションも当初は醍醐いきセン内で予定していたが、一緒に事業をしてみないかということで連携することになった。

令和7年度に関しても、新たな企業からの声かけがいくつかある。今回のイベントでコメントを出してくれた経済界の方からの繋がりや、醍醐地域でゴミ拾いをしたい企業から声がかかっており、子供たちのおしごと体験のようなことができそうか検討している。

(鈴木委員)

自然な流れで、企業のCSRと市民活動が上手く連携していると感じた。今後もこのような流れに期待したい。改めて夢コレクションの良さとして、プレゼンして終わりではなく、フィードバ

ックされる識者が大学教授だけでなく京都経済同友会の方も含まれている点が素晴らしい。ビジネス的な視点でのフィードバックが、新たな企業連携に繋がっていることを聞いて、改めて実現に向けたイベント作りについて色々とヒントを得た気がする。

(森本委員)

醍醐いきセンの活動や他のセンターの報告を見て、子供たちも住民であるということを改めて感じた。もちろん選挙権はないが、子供たちも地域に住み、日々の暮らしの中で感じることや、こうなったらいいなという思いがあるということを、このようにきちんと受け止め、一緒に考え、何とかできる方法を探る場所があることは素晴らしいと思う。今回の報告を聞いて、改めて素晴らしいと思った。

<伏見いきいき市民活動センター>

(森本委員)

自治会・町内会をテーマにした学びの場作りは非常に重要だと感じた。最近、自治会やPTAの解散など、地縁による活動の継続が難しくなっている状況をよく見かける。加入しないがゴミ捨てなどで利益を享受している部分もある。あった方がいいが参加は難しい、課題はある、といった状況で、どのように課題を解決していくかという点で、他の地域の工夫や困難な点を共有できる場合は、自分たちの自治会だけで悩まずに済むという点で良い。悩みを抱える他の人を知ること、現状を打破するヒントや、見習うべき点、変えるべき点などを考えるきっかけとなる。

特に伏見地域は、新しく移住してきた人と古くから住んでいる人が混在し、面積も広い地域であり、このような学びの場は需要があると感じた。このような機会が続くことを期待している。参加者がその後どう活動に活かしたかは地域に委ねられるとのことだが、その後どうだったかといったフォローがあるとさらに良いと感じた。

(東郷委員長)

以前、団地の高齢化に対応するため、学生に関わってもらう取り組みをしていたと思うが、それは今も継続しているか。

(伏見いきセン)

居住の事業については引き続きやっている(3L APARTMENT)。一方、団地に入って住むのではなく活動をするものとしては龍谷大学政策学部と一緒にやっているRyu-SEI GAPというプログラムで、以前孤独死が課題となっていた地域で学生が入って活動する取り組みをしていたものがあつたが、コロナの影響もあり、そこでの活動は現在は行われていない。地域の方での活動自体はされているが、学生が入っているかという点、コロナで一区切りついた状況である。

(東郷委員長)

森本委員も仰っていたように、町内会がカバーしきれない部分や、失われた地域の活力を回復させていくためにも、学生などの若い力が関わっていくことは重要だと思う。ぜひ再開されることを期待している。

<第5期指定管理に係る募集要項（案）について>

令和8年度からの第5期指定管理者募集要綱（案）について事務局から説明を行った。主なポイントは以下のとおり。

- 1 募集対象施設の変更：団地再生計画を機に左京東部いきいき市民活動センターが募集対象から削除され、全12センターでの募集となる。
- 2 指定管理期間：令和8年度から令和11年度までの4年間で予定されている。
- 3 主な業務内容：必須業務として施設の運営（利用料金設定・許可・徴収、情報発信など）と施設管理（点検、修繕、物品管理など）、提案業務として市民活動支援・活性化事業及びサロン運営・活用事業が求められる。指定管理者のノウハウを活用した自主事業の実施も可能である（自動販売機やコピー機の設置などが多い例）。
- 4 管理運営費用：利用料金収入と市の指定管理料で賄われる。指定管理料には必須業務と提案業務それぞれの上限額が設定されており、4年間総額で定められる（金額は調整中）。黒字が出た場合は超過累進的に市に納付する必要がある。
- 5 募集・選定スケジュール（予定）：
 - ・ 募集要綱・申請書の配布：令和7年7月1日
 - ・ 質疑受付期間：令和7年7月1日～7月14日
 - ・ 質疑回答：令和7年7月18日（ホームページに掲載）
 - ・ 申請書類受付期間：令和7年7月22日～8月18日（持参に限る）
 - ・ 審査（書類・プレゼンテーション）：令和7年8月下旬～9月
 - ・ 指定候補者選定：令和7年10月中
- 6 選定基準・方法：評価委員会による審査結果を踏まえ市長が決定する。施設の設置目的に照らし効率的・効果的に管理できるか、人的・財産的基礎を有しているのかなどが基準となる。運営点と事業点の合計点が最も高い団体が候補者となる。虚偽記載や指定管理料収入が上限額を超える場合は失格となる。
- 7 主な変更点（要綱案）：
 - ・ 施設内へのAED設置業務が新たに追加された。
 - ・ 令和5年の建築基準法改正に伴い、法定点検の対象施設が拡充され、中京いきいき市民活動センター（本館・サロン）及び吉祥院いきいき市民活動センター（別館）の法定点検が追加された。
 - ・ 岡崎いきいき市民活動センターは「在り方の基本方針」に基づき、団地再生計画を機に、第5期をもって共用を終了する方針である旨が記載された。
 - ・ 環境配慮推進として、剪定枝等のリサイクルに関する記載が追加された。
 - ・ リスク負担区分において、老朽化に伴う大規模修繕は京都（市）が行うとしていた記載が削除された（「在り方の基本方針」において大規模改修は行わないことを基本とする点と矛盾するため）。
 - ・ 東山いきいき市民活動センターが京都市の指定避難所に指定されたため、災害時対応に関する記載が追加された（北いきいき市民活動センターと同じ内容）。
 - ・ 下京いきいき市民活動センターの機械警備業務に関する記載の表記調整が行われた。
- 8 その他：今後の施設のあり方については、他の市計画等も踏まえ見直しを行う場合がある

ことが追記された。市が必要な場合は、指定管理者が管理する施設を使用する場合がある（協議の上）。

<募集要綱（案）に関する質疑応答>

（東郷委員長）

指定管理料の上限額について、昨今の物価や人件費高騰を踏まえてどのように設定されるのか伺いたい。特に活動への影響が大きい項目（剪定枝処理や居場所関連など）の費用が考慮されるのか。

（事務局）

現在、計理担当部署と調整を行っている。予算に限りはあるが、物価や人件費高騰が各施設運営に影響を与えていることは認識しており、可能な限り、指定管理者が納得できるような形で調整したいと考えている。

（以上）